

天正十一年小早川隆景・羽柴秀吉書状にみられる安国寺恵瓊

——安国寺恵瓊関係資料データベース資料稿（一）——

Ankokuji Ekei Shown in Letter of Kobayakawa Takakage and Hashiba Hideyoshi in 1583

—The First Draft on Collected Documents in Ankokuji Ekei Related Materials Database—

山崎 真克・麻生 由紀・土居裕美子・迫垣内 裕・頼 祺一

Masakatsu YAMAZAKI, Yuki ASOH, Yumiko DOI,

Yutaka SAKOGAICHI and Kiichi RAI

平成二十八年度四月より、比治山大学研究助成を受け、「不動産と安国寺恵瓊に関する研究」を開始した。本研究は、不動産中興の祖とされる安国寺恵瓊に注目し、「不動産文書」の中にみられる恵瓊関係の書状をはじめとした関連資料、および全国に点在する恵瓊関係資料の調査・収集・解読・整理を行うことにより、十六世紀後半における日本の歴史の中で、特に不動産との関わりに焦点を当てつつ、安国寺恵瓊が果たした役割を明らかにすることを最終目的とする。

平成二十九年度は、「安国寺恵瓊関係資料データベースシステム」の構築に向け、恵瓊関係資料の調査・収集・整理を継続的に行った。本稿は、その過程で見出した天正十一年（一五八三）六月廿六日付小早川隆景書状を中心とした報告である。蜂須賀小六宛の当該書状には、賤ヶ岳の戦い後における毛利氏と秀吉方との領土問題についての交渉において重要な役割を果たす存在として、安国寺恵瓊の名がみえている。またこの書状は、これまであまり存在が知られていなかった時期の恵瓊の情報を示すものである。

はじめに

平成二十八年四月より、比治山大学研究助成を受け、「不動院と安国寺恵瓊に関する研究」を開始した。本研究は、不動院中興の祖とされる安国寺恵瓊に注目し、「不動院文書」の中にみられる恵瓊関係の書状をはじめとした関連資料、および全国に点在する恵瓊関係資料の調査・収集・解説・整理を行うことにより、十六世紀後半における日本の歴史の中で、特に不動院との関わりに焦点を当てつつ、安国寺恵瓊が果たした役割を明らかにすることを最終目的としている。

平成二十八年度は、資料群の全体像を把握するため、恵瓊関係資料の調査・収集・整理に重点を置き、関連性の高いものから優先して解説作業および考察を行うとともに、基盤となる情報の集積と活用を目指したデータベースシステムの構築を行った。^(注1)

平成二十九年度においても比治山大学研究助成を受け、安国寺恵瓊に係る資料を網羅的に調査・収集し、構築したデータベースシステムに登録する作業を継続的に行ってきた。

本稿は、こうしたデータベースシステムの構築過程において見出した資料のうち、特に第三者間でやりとりした書状の中に恵瓊の名がみられるものに関する報告である。データベースシステムにおいて「他者の関連」という区分を設けた資料を用いて、毛利氏の使僧として恵瓊の果たした役割について検討する。

一 小早川隆景書状（六月廿六日付）にみられる「安国寺」

『思文閣古書資料目録 第二百五十四号 善本特集 和の史』^{かみ}（平成二十九年七月）に、次に挙げる小早川隆景書状の写真が掲載された。以下に私案による釈文を示す。

60 小早川隆景書状 一幅

今度東北國則時被任

御存分天下御静謐

尤珍重候仍太刀一腰

銀子^{三枚} 令進入候表

御祝儀斗候猶又先

度林木工棧首座^二秀吉

条々以御一書被仰出

趣慥得其心候誠忝

存候貴所御入魂之通

是又太慶候長久可得

御意趣以安国寺被申

入候宜御取合頼存候

猶任彼演説候恐々謹言

六月廿六日 隆景（花押）

蜂須賀小六殿

御宿所

また、同目録には以下のような解説文が付されている。

六月廿六日付 蜂須賀小六宛

本紙 縦16糎 横49・8糎

総丈 縦114・5糎 横66糎 軸装 箱入

毛利元就の三男で、小早川家を継ぐ一方で、兄吉川元春とともに毛利宗家を支えたことで知られる小早川隆景の書状。宛先は、古くから豊臣秀吉に属した武将として著名な蜂須賀正勝（小六）である。内容は次の通り。

今度東北国を即時に従えられ、天下が静謐となったことは大変珍重なことです。よって、太刀一腰と銀子三枚を進上いたします。ご祝儀を表すばかりでございます。また、先度、秀吉が林木工・棧首座に対して一書をもって仰せ出された内容については、承知いたしました。誠に忝く存じます。あなた様が入魂されていた通り、これまた大慶に存じます。これからも長く御意を得たいということについて、安国寺恵瓊をもって（毛利輝元が）申し入れられました。宜しく御取り成しただけますようお願いいたします。なお詳しいことは恵瓊より申し上げます。

「東北国」を即座に従えたという記述は、秀吉が柴田勝家を破った、天正十一年（一五八三）の賤ヶ岳の戦いを指すとみられ、その報を受けた隆景が、戦勝祝いとして太刀・銀子などを送っていることが分かる。また、交渉の使者として、毛利家の外交僧として活躍した安国寺恵瓊の名が記されている。

このように、蜂須賀小六宛の小早川隆景書状の中に、恵瓊を指す「安国寺」という文言がみられる。書状の内容は、「入魂」という語の用法にやや疑問が感じられるものの、ほぼ目録の解説文に述べる通りであると認められる。天正十一年（一五八三）四月、賤ヶ岳の戦いおよび越前北ノ庄城攻めにおいて、羽柴秀吉が柴田勝家を打ち破ったことに対し戦勝祝いを送るとともに、備中高松城講和以後の毛利氏との講和条件交渉について述べている。

天正十一年（一五八三）五月十五日付の秀吉から隆景に宛てた書状（『毛利家文書』九八〇）において領国の「境目之儀」にふれているが、当該書状に「以安国寺被申入候」とあるように、恵瓊が実際の交渉にあたっていたことが知られる。

なお、天正十年（一五八二）七月廿三日付の隆景から「蜂須賀小六」に宛てた書状が名古屋博物館に所蔵されている。本能寺の変の後、六月十三日に秀吉が明智光秀を破った山崎合戦の戦勝祝いを述べたもので、使者として「安国寺」（恵瓊）を派遣したことが記される。写真掲載および解説・釈文を付した『続・秀吉に備えよ!! ―羽柴秀吉の中国攻め―』（長浜市長浜城歴史博物館 二〇一四）では、書状の宛先を蜂須賀家政（正勝男）

とする。同一人物の書状であり、またともに戦勝祝いという内容の一致によろと思われるが、二通の書状には共通した文言がみられる。なお、積文には修正が必要な箇所が存するため、該当箇所に傍線を施した上で下段に私案を示した。

74 小早川隆景書状 蜂須賀家政宛 一通

天正十年（一五八二）七月二十三付

愛知県 名古屋市博物館蔵

一七・〇×四九・八

天正十年（一五八二）六月二日、織田信長が本願寺で横死すると、秀吉は急遽毛利氏と和睦し、中国大返しを経て、十三日に明智光秀を山崎合戦で破る。この書状は、その合戦から一ヶ月余の後に、毛利輝元の後見・小早川隆景が秀吉家臣の蜂須賀家政に送ったもの。備中高松城での和睦が、家政と父の正勝の尽力で成立したことを謝している。また山崎合戦の祝勝の使者・安国寺惠瓊を派遣したことを述べている。また和睦後も、秀吉と毛利氏の懸案になっている毛利氏領国割譲問題での取りなしを依頼している。隆景は、秀吉を「天下、御存分に任せられ」「西国静謐の儀、しかしながら秀吉のご案中にこれある。」とあたかも秀吉を天下人のように表現しているのが興味深い。備中高松開城以降、毛利氏は秀吉と歩調を合わせ歩んでゆく。また交渉の過程で、小早川隆景は秀吉から絶大な信用を得ることとなる。

(積文)

先度者和睦之儀以御馳走

相調弥重候其後頓可申入之

慶安国寺俄被罷上候条相過候、

然者自輝元為御祝儀重而

西堂被差上候間御親交被仰

談可然之様御入魂肝要候

隨而国切等之事被任天下御

存分上者、近年申付候傍爾

被加御分割候者、一人之儀申談

長久可得御意候、西国静

謐之儀任秀吉御案中在之

事候、仍御太刀一腰馬一疋

進之候、表御祝儀斗候猶

任口上候恐々謹言

七月廿三日 隆景(花押)

蜂須賀小六殿 御宿所

*「珍重」か

*「處」か

*「分別」か

先述の書状の約一年前にあたるものであるが、この際にも「安国寺」「西堂」(惠瓊)は単なる戦勝祝いの使者としての役割を果たすだけでなく、毛利氏の領土問題について秀吉方と実際の交渉にあたっていたと思われる。

二 羽柴秀吉書状（六月廿一日付）にみられる「安国寺」

続いて、羽柴秀吉の書状の中に「安国寺」という文言がみられる史料を取り上げる。前稿の注においてもふれたように、この天正十一年（一五八三）六月二十一日「羽柴秀吉書状 伊藤与左衛門尉宛」には、毛利氏と領土交渉をしていた秀吉が、恵瓊をもてなすよう家臣に指示した内容が記されているという点について、平成二十八年六月に発表されている。なおこの史料は、長浜市長浜城歴史博物館の特別展「石田三成と西軍の関ヶ原合戦」平成二十八年七月二十三日～八月三十一日）で、中国攻めや賤ヶ岳合戦後の秀吉の領土交渉が分かるものとして展示された。写真掲載および解説・釈文を付した同博物館編『石田三成と西軍の関ヶ原合戦』（二〇一六）によって内容を示す。

30 羽柴秀吉書状 伊藤与左衛門尉宛

（天正十一年「一五八三」）六月二十一日

一卷

個人蔵

二六・三×四一・〇

賤ヶ岳合戦に勝利した羽柴（豊臣）秀吉が、家臣の伊藤与左衛門尉に宛てた書状である。中国地方の戦国大名毛利氏の外交僧、安国寺恵瓊が帰国するので、丁重にもてなすこと。また、高槻（大阪府高槻市）まで馬三疋を準備したので、これを使って安国寺を送ること、さらに高槻から先の手配も怠らないよう命じている。

さら

秀吉は、本能寺の変があった天正十年（一五八二）から、毛利輝元と領土の割譲問題について協議しており、毛利側の交渉役を担当していたのが安国寺であった（秀吉側は蜂須賀正勝小六と黒田孝高）。この領土問題は、天正十三年（一五八五）春によく決着を見るが、その交渉過程で、安国寺が京都にいた秀吉（あるいは秀吉関係者）のもとを訪れていたと考えられる。

これまで、秀吉と安国寺が同年七月、堺で会談したことはよく知られていたが、六月の京都での交渉は他に記録がなく、本書によってのみ知られる。天正十一年の段階で、秀吉方と毛利氏の交渉が順調に行われていたことが窺える。（福井）

（釈文）

安国寺帰国候、「其方にて、よくふる」まひ致御馳走候て「肝煎専一候、」たかつきまで馬三つ」申付可相進候、「可進御届候、恐々謹言

筑前守

六月廿一日

秀吉（花押）

伊藤与左衛門尉殿

書状の内容としては解説に述べられた通りと認められるが、釈文には二行分の欠落がある。改めて書状本文の釈文を示すと次のようになる。

安国寺帰国候

其方にてよくふる

まひ致御馳走候て

肝煎専一候

たかつきまで馬

三つ申付可相進候

高槻よりさきく

の儀も肝煎候て

可進御届候恐々謹言

筑前守

六月廿一日 秀吉(花押)

伊藤与左衛門尉殿

解説の末尾にもふれられているように、天正十一年(一五八三)七月に秀吉と恵瓊が堺で会談したことは、河合正治氏『安国寺恵瓊』(吉川弘文館一九五九)にも『顕如上人貝塚御座所日記』を根拠として指摘されている^(注1)。しかし、同年六月の段階で、毛利氏と秀吉方との領土問題について恵瓊が実際に京都で交渉にあたっていたこと示す史料として、当該書状は他に例を見ないとされる。とするならば、前節で取り上げた天正十一年六月廿六日付の小早川隆景書状も、時期的には天正十一年(一五八三)五月十五日付の秀吉から隆景に宛てた書状(『毛利家文書』九八〇)と、同年七月の『顕如上人貝塚御座所日記』の記述の間に位置することになる。恵瓊が領土問

題の交渉にあたっていた際の所在地を示す直接の根拠は見出せないものの、六月廿一日付羽柴秀吉書状と同様に、この時期に秀吉方との交渉にあっていた恵瓊の姿をうかがい知ることができる貴重な史料であると言える。

おわりに

本稿では、安国寺恵瓊関係資料データベースシステムの構築過程において見出した資料のうち、特に第三者間でやりとりした書状の中に恵瓊の名がみられるものに関して述べてきた。間接的ではあるが、天正十年(一五八二)備中高松城講和以後の毛利氏と秀吉方との領土問題について、恵瓊が交渉にあたる役割を果たしている様相をうかがうことができた。また、今回取り上げた天正十一年六月廿六日付の小早川隆景書状は、これまであまり存在が知られていなかった時期の恵瓊の情報を示すものであるという可能性を指摘することができた。

今後、安国寺恵瓊自筆資料のみならず、今回対象としたような第三者間でやりとりした書状なども視野に入れ、網羅的に恵瓊関係資料の調査・収集・整理を継続していく。資料の収集にあたっては、既に公開されている各種データベースを手がかりとしつつ、新出資料も含めて幅広く情報を入手する必要がある。最終的に有効なデータベース活用方法を確立することを念頭に置きながら、引き続き本研究を進めていきたい。

〔注〕

1 山崎真克・麻生由紀・土居裕美子・迫垣内裕・頼祺一「安国寺恵瓊関係資料データベースシステムの構築とその活用について」(『比治山大学

『紀要』第二十三号 二〇一七)

2 河合正治『安国寺恵瓊』(吉川弘文館 一九五九)「三 天下一統への情熱」六八頁。

3 平成二十八年(二〇一六)六月四日付『朝日新聞』『毎日新聞』『産経新聞』などにおいて報道されている。

〔付記〕 本稿は、平成二十九年度比治山大学研究助成「不動院と安国寺恵瓊に関する研究」による研究成果の一部である。

〈キーワード〉 不動院、安国寺恵瓊、データベース、小早川隆景、蜂須賀小六

山崎 真克(現代文化学部言語文化学科日本語文化コース)

麻生 由紀(不動院(比治山大学大学院現代文化研究科現代文化専攻日本地域文化研究修了))

土居裕美子(鳥取看護大学看護学部看護学科)

迫垣内 裕(比治山大学短期大学部総合生活デザイン学科)

頼 祺一(広島大学名誉教授 比治山大学名誉教授 頼山陽史跡資料館館長)

(二〇一七年十一月一日 受理)